

世界をみつめる

武修館中学校 3年

前野 由似香

「勉強ってめんどくさい。」自分と同年代の子どもたちから発せられたその言葉。すこし前までのわたしなら、気にもとめず、聞き流していただろう。しかし、今のわたしなら、その言葉の無責任さに、腹を立てる。

残念なことに、現在の世界は不平等だ。金銭的な面や生活環境は、住む国や地域によって、大きく異なる。日本は大分裕福な方だろう。わたしがこの現実を深く見つめなおしたのにはきっかけがあった。それは、インターネットで見たとある記事だ。筆者は、食糧援助のためにケニアを訪れたという日本人の男性だった。

彼が食糧を配って回った先には、国を追われた難民、干ばつにより、生活の糧である家畜をすべて失った遊牧民、そして、スラム街に住む、両親をエイズで亡くした十代の四人兄弟がいた。

現地で、その男性は、彼らにこのような質問を投げかけた。「食糧以外にどのような援助を求めますか。」これからの援助活動の参考にしようとしたのだ。衣類や薬などの物資をその時までは思い浮かべていた。

しかし、予想は大きく外れた。三か所で返ってきた答えは全て一緒だった。それは「教育の援助」だ。難民や遊牧民は、自分の子どもやその次の世代の子どもたちへの教育を強くのぞんでいた。自分自身のような苦しい生活をしてほしくないようだった。一方、スラムの兄弟の上から二番目の男の子には夢があった。「教師になりたい」教師になって、自分と同じような境遇の子どもが多くいるこの地で、勉強を教えたい。自分は勉強が好きなので、手助けをしてもらいたい、と言った。

日本という恵まれた国に住むわたしたちにとって、教育は受けることが「当たり前」だ。

勉強するための道具がそろっていて、教えてくれる人もいて整った環境がある日本。しかし、現代の子どもたちには、勉強を学ぶ本人に強い意志がないように感じられる。世界に目を向けて、自分が教育を受けられていることがいかに幸せなのかを知らなければならない。また大人は、それを、これから子どもたちに伝えていく義務があると、わたしは考える。少し考え方や見方を変え、自分の生活を見つめなおすだけで、人は行動できる。世界中で苦しんでいる人を助けられるのは他でもない、このわたしたちなのだ。まずは自分から、動いてみてはどうだろう。